それ自身に向つて、離れ〳〵に存在するのでなく、一個の同一性を形成する。對立物と矛盾とは同一性のうちに含まれてゐる。抽象的な形式的な同一性は現實には存在しない。各〻の個體は常に絶えざる變動のもとに置かれて居り、かゝる變動はその『同一性』の種類を變化し且つ止揚してゐる。

各〻の具體的な生きた同一性は、差別を含み、對立を含んでゐる。また總べての對立は相互に中間の關節または中間の階段を推移する。だから自然においても社會においても到るところ絶對的の限界はない。この世において何物も卽自的向自的に存在してゐるのでなく、總べてのものが自餘の全體と聯絡して存在してゐる。一の出來事はそれが同時に同一であるが故を以て正に矛盾に充ちて居り、それが同時に矛盾を孕むが故を以て正に同一である。

もし此の世において一切のものがそれ自身と同一であつたならば、そこには何等の變化、何等の發展も起らぬであらう。自然の根本法則は運動である。ところ

で運動は一の形態の他の形態への變化であり、一のものゝ他のものへの連續的推移である。世界の全現象は、一の形態或ひは現象の他のものへの永久なる轉化に立脚する。形態轉化の進行發展の過程は、對立物の轉化といふ方法によつて行はれる。しかし、これらの對立物は統一のうちに含まれて居り、この統一の分裂から出て來る。『一切の世界の進行を「自己運動」において、自發的發展において、生ける實在において把握するための認識の條件は、それらをば對立物の統一として認識することである』と、レーニンは正しく言つてゐる。發展は對立物の『鬪爭』を意味する。

二

發展については二つの見解があると、レーニンは言つてゐる。その一は、發展においてたゞ增減を見、反覆を見る。この見解は生命のない、死んだ且つひから

びたものである。

他の見解はこれに反し、發展の基礎を、對立物の統一とその統一の分裂とに看取する。この見解のみが吾々に、總べて實在せるもの、自己運動の理解に對する鍵を提供する。しかしこの見解は、總べて實在せるもの、あらゆる事物は――一の共通なる紐帶により、相互的なる聯絡により、統一に齎さるところの對立物に、分裂することにおいて、――その内在的矛盾の力により『それ自身に運動する』ものだ、といふ見地から出て來る。

この考を具體化するためには、吾々はたゞ現代のブルヂョア社會を指示すれば足りる。現代のブルヂョア社會は、相對立したる、しかし一定の相互關係により相互に聯絡されたる、諸階級に分れてゐる。プロレタリアなくんばブルヂョアなく、ブルヂョアなくんばプロレタリアもまたない。從つてまた、階級鬪爭なくんば、何等の發展もあり得ず、何等の前進もあり得ぬのである。

對立物の統一の把握が、始めて『吾々に總べて實在せるもの〻、自己運動の理解に對する鍵を提供し』、始めて吾々をして『跳躍』の、『連續性における斷絶』の、『反對物への轉化』の、『古きもの〻消滅と新たなるもの〻發生』の理解を可能ならしめると、レーニンは言つてゐる。

實に跳躍、連續性における斷絶、反對物への轉化、量から質への推移およびその逆は、たゞ對立物の統一によりてのみ説明され得る。すべての對極的反對物は、相對立せる双方の極の相互關係に依存する、とエンゲルスは言つた。それらのもの〻合一はたゞその分岐によつてのみ存立し、その聯絡はたゞその對立によつてのみ存立し、しかもまたその對立はたゞその結合と合一とによつてのみ存立する。だから總べての對立物は相對的であり、相互に推移し合ふものである。自然ならびに歴史における有らゆる出來事は、たゞ『自己運動』としてのみ、即ちその聯絡と統一との限界内における對立物の曝露および闘爭としてのみ、可能なる

に止まる。

自然は無窮の統一を表現して居る。その統一のうちに一切のものが識別し難き推移により聯絡されて居り、材料の運動の多樣なる表現が相互に轉化し合ひ、かくて力學的運動、熱、光、電氣は一定の事情のもとに相互に變通する。しかも有らゆる變化は、量から質への、および質から量への推移の方法によつて行はれる。

對立物の同一性は、初等數學と高等數學とがその上に立脚するところの基礎を形成する。エンゲルスは『排デューリング論』のうちで、『高等數學の主要基礎の一は、直線と曲線とが或る事情のもとでは同じものであるべきだといふ矛盾を形成する』と書いてゐる。ポジティーヴ(＋)とネガティーヴ(－)との同一性はまた、初等數學の基礎を形成するものである。だからレーニンは正數と負數との此のエレメンタルな同一性の形態が初等數學に對して有する意義を高調してゐる。(この

次にあるヘーゲルよりの引用文より成る一節を省略す、――譯者）

翻つて力學を見るならば、吾々は茲で最もエレメンタルな、最も簡單な運動形態を取扱ふのであり、しかる限りにおいてまた最も簡單な形態の辯證法を取扱ふのだといふことが、高調されねばならぬ。力學的運動の最も簡單な形態は、作用および反作用の同一性となつて現はれる。力學的運動はたゞ場所の變化である。だからそれはたゞ分量を問題とするのであり、從つて力學にあつては分量が基礎的な範疇を形成するのである。

今日のアトム説の基礎は、アトムを以て對極的な對立物の一個の統一、一個の體系となすことから成り立つ。今日廣く行はれてゐる考によれば、アトム（原子）は陽電氣と陰電氣とから成り立ち、さうしてアトムの中央には陽電荷の核があつて、その周圍を電子が旋廻してゐる。なほ核の構造はアトムの構造に反對したものだと假定されてゐる。吾々は茲でアトムの構造やその核の構造について、これ

以上述べる必要はない。吾々の目的には以上述べたところで足りる。

化學は更に矛盾のより廣き領域を表現する。そこでは對立物の統一が、レーニンの言ひ現せる如く『アトムの結合および解離』において出現する。吾々は物理學、特に化學においては、物體の量的變化に適應する質的變化を、それら變化の聯絡において考究する。他方吾々は、正に物理學および化學において、力學に比すれば一層高度なる形態の對立物の統一を取扱ふ。力學においては、對立物は相互に純外部的に對立する。しかるに化學においては、種々なる對立的の物體が引力または『親和力』のために一個の新たな物體に結合し、これによつて其等のものは互に全く滲透し合ひ、かくて其の結合に入り込んだ各物體のそれ〴〵の性質は何れも消え去り、全く新たな性質――それは專ら新たに成り立つた物體にのみ屬するもの――が現はれることになる。

かくて吾々が、力學、物理學および化學において取扱ふものは、種々なる運動

形態である。エンゲルスはいふ、『あらゆる漸次性に拘らず、一の運動形態から他の形態への推移は、いつも一の跳躍であり、一の決定的な轉換である。天體の力學から個々の天體の上におけるより小さな物の力學への推移が卽ちそれであり、物體の力學から分子の力學への推移がまたそれであり、——吾々が固有の意味の物理學において考察するこころの、熱、光、電氣、磁氣に關する諸運動を包括せるもの——更に分子の物理學からアトムの物理學——卽ち化學——への推移が、同じやうにまた一の決定的跳躍によつて行はれ、なほまた通常の化學的作用から、吾々が生命と名づくところの、蛋白質の化學作用への推移の場合が、やはり同樣である』。*

レーニンがヘーゲルおよびエンゲルスに因んで、力學、物理學、化學、社會學といふ系列を並べてゐるのは、彼が對立物の統一と個々の運動形態相互の推移とにつき、全く同じ考を有つてゐるといふことを意味する。この場合吾々が數學を

* エンゲルス『排デーリング論』(Herrn Eugen Duhrings Umwälzung der Wissenschaft, 10 Aufl. 1919. S. 57.)

無視するのは、それが現實性の現實な進行の抽象的な表現として、概して特殊の地位を有つからである。

三

現實において一切のものが矛盾に充ちて居り、且つ一定の發展條件の下において內的統一および聯絡のために總べての實在せるものが反對物に轉化すると同じやうに、概念もまた可動的な、矛盾に充ちた、且つ屈曲性のものである。何故ならば、概念なるものは、物質的進行および吾々の外部における統一の單なる反映を代表するものであるから。

『對立物の同一性の樹立にまで進み行くところの、概念の全面的な普遍的な屈曲性が、本質的なものである』と、レーニンは他の場所で言つてゐる。

懷疑主義および詭辯論は、概念のこの屈曲性を主觀的に觀察し解釋してゐる。

懷疑主義および詭辯論は、例へば相對を絶對から切り離し、これを主觀的のものたらしむることにおいて、相對をたゞ專ら相對的なものとしてのみ觀察してゐる。これに反し、辯證法論者にとつては、相對と絶對との區別が既に相對的である。『屈曲性（概念の――補註）は、それが客觀的に應用さるゝかぎり、卽ち物質的過程およびその統一の全面性を反映するかぎり、辯證法であり、永遠なる世界運動の正當なる反映である』と、レーニンは言つてゐる。

『主觀主義者および懷疑主義者は、たゞ有限、相對とのみが認識され得ると主張してゐる。彼等は有限と相對とが無限と絶對とに對して有する聯絡を見ない。だから彼等はあらゆる相對的の認識を主觀的認識となし、これを客觀的認識とならない。けれども、根本的に言へば、あらゆる眞實なる相對の認識は絶對と無限との認識であり、客觀的世界過程の認識である。』

レーニンのいふところによれば、辯證法の總べてのエレメントの胚種は、既に

任意の定言のなかに含まれてゐる。何故なれば、辯證法は總べての人間的認識に固有なものであるから。絶對はたゞ相對の媒介によつてのみ近かづき得るものであり、それ自身が相對的な有限的な契機から『建設』されてゐるがゆゑに、吾々は啻に絶對を相對において認識するばかりでなく、また普遍はたゞ個別によつてのみ存在するがゆゑに、吾々は個別において普遍を認識するのである。個別と普遍との間における相互關係はやはり對立物の同一性を形成し、相互的な聯絡と一のものから他のものへの推移とを形成する。レーニンは、研究にしろ、叙述にしろ、簡單なもの、基礎的なもの、大量的なものから始めべきであることを、高調してゐる。マルクスが『資本論』において爲せしところも亦たそれである。彼は商品を以て始めてゐるが、この商品が既にブルヂョア社會の一切の矛盾を含んでゐるのである。その後の叙述は、既にブルヂョア社會の細胞に含まれてゐる一切の矛盾の曝露に外ならぬ。

あらゆる定言のうちには、一個の『細胞』におけるが如く、辯證法の一切のエレメントの胚種が包藏されてゐる。『ヨハンは人である』といふ定言のうちには、個別が、特殊が、また普遍であるといふ辯證法的定言を含む。それは、有限は變じて無限となり、個別は普遍となることを示す。個別はその孤立を失ひ、他と、普遍と、無限と結びつき、みづからをそれに媒介する。箇別は普遍に對立したものであるが、同時にまた普遍と同一なものである。特殊なり箇別なりは、獨立し、孤立し、他と聯絡することなしに、存在するものではない。それは普遍と一切の現實的現象と、結合してゐる。しかし普遍もまた、たゞ箇別によつてのみ存在する。だから箇別はよく普遍を表現し、また一切の普遍は箇別の『本質』を組成する。

普遍は、辯證法の見地からすれば、形式論理におけると反對に、決して空なる抽象ではなく、むしろ一切の箇別の本質的契機または本質である。『如何なる普

遍も或る程度までは總べての箇別的な事物を包括し』他方『如何なる箇別も完全には普遍に入り込まない』。形式論理の抽象的普遍に對するものは、箇別および普遍の全部の富が包含されてゐるところの、具體的普遍である。マルクスおよびエンゲルスと同じやうに、レーニンもまた、概念には箇別、特殊および普遍の三つの方面または契機があるとなすヘーゲルの學說に、一致してゐる。箇別的な事物から特殊への推移が行はれ、更に特殊から普遍への推移が行はれる。

普遍は決して空な、抽象的な同一性ではなく、むしろ特殊と箇別とを、卽ち區別と對立とを包含するが如き同一性である。

普遍と特殊とは、そのものが正に區別されたものまたは箇別的なものであるところの、統一のうちに與へられてゐる。だから普遍はたゞ箇別においてのみ、且つ特殊との結合においてのみ、自らを實現する。それ自身に家であり人であるものはない、存するところのものはたゞ一定の家と一定の人とである。かくて箇別は

普遍として現はれるが、普遍はまた箇別として現はれる。

辯證法的概念にあつては、これら三つの契機は不可分的に相互に結びついてゐる。たゞ斯かる概念――それはレーニンが言へる如く、『特殊と箇別との全部の富をそれ自身に合體する』ところのもの――のみが、具體的な、完全な概念である。レーニンはいふ、『各〻の概念は、推移の無數のものによつて、他の種類の箇別的な事物や、現象や、進行等と關聯してゐる』。かくて吾々の認識は箇別を特殊および普遍の階段に上ぼすのである。無限のうちに吾々は有限を見出す。かゝる認識が自然の客觀的聯絡を正當に反映するのである。

箇別は、その一回限りの、直接の存在においては、一方において何程か偶然的のものであるが、しかし他方において、――箇別が普遍をそれ自身のうちに含み、それが普遍であり、また普遍が箇別の本質を組織する限りにおいて、――また何程か必然的のものである。偶然と必然は、現象と本質の如くに、互に對立さ

れる。同じことを吾々はまた自然科學において見る。だからレーニンはいふ、自然科學は『自然における同一の特徴――箇別の普遍への、偶然の必然への轉化、推移、跳躍、對立物の相互的聯絡――を吾々に示す』と。

レーニンは、プレハーノフが『通俗的であるために』、對立物の同一性を世界と認識との普遍的法則として示すことの代りに、これを例證の合計として現はしてゐることを、非難してゐる。對立物の同一性または統一の法則が如何に理解さるべきかは、吾々の既に述べたところである。

レーニンがプレハーノフに對してなせし第二の非難は、『辨證法は正にヘーゲルおよびマルキシズムの認識理論である』に拘らず、プレハーノフが理識理論を以て一種の獨立した學科と看做し、或る意味において之を辯證法に對立せしめてゐる點である。辯證的認識理論は、その對象たる認識そのものを、歷史的に、卽ち自然および精神の總生命の、世界の全具體的內容の發展に立脚するものとして、

把握する。だから形而上學的唯物論は一面的であり、制限されて居り、內容貧弱である。

□

反對に辯證的唯物論は、『澤山の階段を伴ふ、生きた多面的な認識』であり、無限に豐富なる內容の無限に錯雜せる認識過程であり、決して完全には汲みつくすことの出來得ない現實への絕えざる近接である。人間の認識は、『それ自身無數の環に極めて近接するところの』一つの曲線をたどる。レーニンは多くの斯かる『環』を示す。デモクリット――プラトー――ヘラクリット。デカルト――スピノザ。ホルバッハ――(バアクレー、ヒューム、カントを越へて)ヘーゲル。そしてヘーゲル――フオイエルバッハ――マルクス。

總べて後繼する環は、それに先行せるものよりより廣く、より多面的であり、

且つその基礎と前提とを形成するところの、その先行者に比して、より高き發展段階を代表する。

各〻の環は、一定の時期における世界の認識の結果を包含し、人間の實踐と認識とが到達し得たるその時々の發展高度によつて與へられてゐるところの、現實への能ふ限りの近接を包含する。

それゆゑに、レーニンは他の場所で正當に次の如く述べてゐる、マルクス學は『人類が十九紀においてドイツの哲學、イギリスの經濟學、フランスの社會主義の姿において到達したる、最上物の完成された遺産である』。* 現代の最後の環はマルクスで終つて居る。それゆゑに、マルキシズは、人間の認識の過去の全歷史の結果であり、普遍化であり、その最高の取得物である。しかも自明なることは、『環』は決して完全に『とざされる』（完全な一つの圓を描き了るに至ることを意味する）ことなく、人間の認識はたゞ環に極めて近接し得るだけであり、嘗て

* 本書77頁參照

それを『とざし』たり、完了したりするものでない、といふことである。現實は汲みつくし難いものである。それゆゑに人間の認識は常に近似的に正確なる世界の反映たるに過ぎない。人類は、その歴史的發展の過程において、客觀世界に該當した認識、絶對の認識に、絶えず益〻近づく。けれども、吾々の認識は、しかく絶對に近接し得るとしても、しかもなほ常に依然として相對的である。

既に辯證法は『澤山の階段を伴ふ多面的な認識』、現實への近接を表示するものであるから、『環』に近接しつゝある曲線の各〻の『階段』または行程から、一つの哲學的體系が生れることになる。この意味で、哲學的唯心論も空中に游離してゐるのではなく、レーニンが云つたやうに、その『形而上學的の根幹』を有つてゐる。何故となれば、『かゝる曲線の任意の一碎片または一斷片は、一つの獨立の、連續した直線になり得る』からである。『眼前の樹を見て森を見得ないやうなやからは、こゝから直に沼澤の中へ、宗教論へ陥込む。（それらはそこで支配階級の

階級利益と結付いてゐる）』

哲學的唯心論は必ずしも絶對的虚僞を表はすものだと云ふことは出來ない、何故なれば、それは唯心論と同一の土地から生へてゐるものだから。『唯心論も唯物論も共に、生ける、多實なる、眞の、力に充ちた、全能な、客觀的な、絶對的な、人間の認識の生ける樹に咲く』。それにもかゝはらず、哲學的唯心論は尙ほ虚僞であり、實を結ばぬ虚花たるに止まる。そは無限に錯雜せる認識の一階段を絶對となし、現實の一部分を全體となすが故に、宗教論となる。

『哲學的唯心論は、辯證的唯物論の立場からすれば、認識の諸特徴の一が、諸方面の一が、諸限界の一が、物質や自然から切離されたる、神化されたる絶對にまで、一面的に、逸脱的に、跨大に（デイツゲン）、發展され（擴大され膨大され）たものである』。

唯心論者は、現象の總體からその一『斷片』を引きちぎり、それを物質との關聯

から奪ひ去ることによつて、同時にまた彼等は一片を全體にまで膨大させ、それをして絶對の位をとらしめる。これに反し、辯證的唯物論は、一般的の關聯から引離され、物質から切離された斯かる斷片は、あらゆる實在性を缺ぐものであり、『實のならざる虚花』であることを、常に知つてゐる。それゆゑにレーニンは、主觀主義や主觀的盲目の中に、即ち直線なる一部分を提へて全體を直線と考へ、それを一個の全體系にまで膨大させ、これを絶對たらしめるやうな化石化と一面性との中に、唯心論の形而上學的根幹を見た。

しかし一個の『階段』もまた、物質的な世界事象と、その統一、その全體性とを反映するところの、かの多樣性の全光景との關聯さへ有てば、『實在性』を有つ。それゆゑに、觀念的なものと物質的なものとの區別や對立もまた、決して無條件的、絶對的ではなく、むしろたゞ相對的である。レーニンが極めて美事に表現したやうに、吾々は生ける客觀的の人間的認識の生ける樹において、可能な總べて

の階段、最も多樣な特徴と境界とを見出す。それは樹全體に對する、物質的事象の總體に對する關係によつて、始めて現象となる。これに反し、各段階はそれ自身としては單に一面的であり、それゆゑに虛僞なる、眞實ならざる、物質的の土地から切り離されたる、客觀的事象の反映である。しかるに眞の辯證法的認識は、物質的事象の全面性とその統一とを反映する。それは事物や、自然や、出來事の經過自體の辯證法を、その全體の多樣性や多面性のまゝで、具體的な統一に結合し、反映しなければならぬ。

辯證法に關する斷片

レーニン遺著

統一的なものゝ分解(Spaltung)と、その矛盾に滿ちたる構成分の認識とは、(ラッサール『ヘラクリット』第三部の冒頭、ヘラクリットに關するピロン—Philon—からの引用文を見よ)、辯證法の本質(『本質的なもの』の一、たとひ唯一の基礎的特徴または主たる特徴ではなくとも、基礎的特徴の一)である。正にそれゆへにヘーゲルもまた之を問題とする。(アリストテレスは彼れの『形而上學』において絶えずこの問題に苦惱し、且つヘラクリットと、卽ちヘラクリットの理念と、格闘している)。

辯證法の內容のかゝる方面の正しさは、科學の手において證明されねばならぬ。辯證法のかゝる方面には、通常（例へばプレハーノフにおける如く）十分な注意が向けられてゐない。對立物の同一性は、例證の合計として考へられ、（單に通俗化のためにとはいへ、エンゲルスもまた爲せし如く、――『例へば種子』、『例へば古代共產制』）、認識の法則（および客觀世界の法則）として考へられてゐない。

數學においては、正數および負數、微分および積分。

力學においては、作用および反作用。

物理學においては、陽電氣および陰電氣。

化學においては、アトムの結合および解離。

社會科學においては、階級鬪爭。

對立物の同一性（より正しくいへば、むしろその『統一――もつと

も『同一性』と『統一』との表現の區別は、この場合何等本質的なものではない、或る意味においては両者とも正しい）は、（精神および社會を含めての）自然のすべての現象と進行とにおける、矛盾に充ちた、相互に排斥し合ふ、對立した傾向の認識（發見）を意味する。一切の世界の進行を『自己運動』において、自發的發展において、生ける實在において、把握するための認識の條件は、それらをば對立物の統一として認識することである。發展は對立物の『闘爭』である。發展（進化）に關しては二つの基本的な（または可能的な？　或は歴史に現はれた）見解がある。縮少および擴大としての、反覆としての發展、および對立物の統一としての發展。（統一的なものゝ互に排斥し合ふ對立物への分裂と其等の相互的關係）。

第一の見解は死んだ、つまらない、ひからびたものであり、後者は生

きてゐる。たゞ後者のみが總べての『實在せるもの』の『自己運動』の理解に對する鍵を提供する、それのみが『跳躍』の、『連續における斷絶』の、『反對物への轉化』の、古きもの、廢滅と新たなるもの、發生との、理解に對する鍵を提供する。

對立物の統一（合一、同一性、作用平衡）は、條件的であり、一時的、過渡的、相對的である。相互に排斥する對立物の鬪爭は、發展が運動が絶對的であるやうに、絶對的である。

注意せよ。主觀主義（懷疑主義、詭辯論、等、）と辯證法との區別は、なかんづく次の點に、卽ち（客觀的）辯證法においては相對と絶對との區別そのものが相對的であるといふ點に、横たはる。客觀的辯證法にとつては、相對のうちに絶對が含まれて居る。主觀主義および詭辯論にとつては、相對はたゞ相對的であつて、絶對を排除する。

運動の第一見解にあつては、自己運動、その推進力、その源泉、その動機が、蔭にかくれてゐる、(或はかゝる源泉が外部――神、主體、等――に移される)。後者の見解にあつては、主目標が正に『自己』運動の源泉の認識に向けられてゐる。

マルクスは、『資本論』において、先づブルジョア的商品社會の最も簡單な、最も普通な、最も基礎的な、最も大量的な、最も日常的な關係、即ち商品交換を分析した。その分析は、この最も簡單な現象において(ブルジョア社會のこの『細胞』において)、現代社會の總べての矛盾(即ち總べての矛盾の胚種)を發見した。それより以上の叙述は、これらの矛盾の、および――始めから終りまで、その根本構成分の總和として考へられた――かゝる社會の、發展(成長ならびに運動)を、吾々に擧示する。

これが辯證法の叙述の（從つてその研究の）方法でなければならぬ、（何故なれは、ブルジョア社會の辯證法はマルクスにあつては只だ辯證法一般の一個特種の場合に過ぎぬから）。最も簡單なもの、最も普通なもの、最も大量的なもの等、例へば木の葉は青いとか、ヨハンは人であるとか、スピッツ（ポメラニアン種の犬）は犬であるとか云ふが如き、任意の定言を以て始めたとする。さうしたならば、吾々は既にそこに、（ヘーゲルが天才的に認識したやうに）、箇別的なものは普遍的なものであるといふ一つの辯證法を有つ。（これについては、アリストテレスの『形而上學、シュウェーグラー譯、第二卷、八、四〇、三。第四冊、第八章より第九章、『何故なら、勿論吾々は、眼に見える家以外に家（家一般）が存在するとは考へ得られぬから』を參照せよ）。

かくて對立物（箇別は普遍に對立する）は同一である、箇別はたゞ

聯絡において、のみ存在し、その聯絡は普遍に導く。普遍はたゞ箇別の方法で）普遍である。総べての普遍は、箇別の一部分、一方面、または本質を形造る。総べての普遍は、総べての箇別物をたゞ近似的に包容する。総べての箇別は、普遍のなかへ單に不完全に入り込む、等、等。総べての箇別は、推移の無數のものによつて、他の種類の箇別的な事物や、現象や、進行等と關聯する。こゝに早くも、自然等における客觀的關聯の、必然性の概念の、エレメントが、胚種が存する。偶然と必然、現象と本質が、既にこゝに存在してゐる、何故なれば、もし吾々が、ヨハンは人であるとか、スピッツは犬であるとか、これは木の葉である、などゝ云ふならば、一系列の特徴を偶然的なものとして取りのけ、たゞ現はれてゐるものから本質的のものを選り分け、それらを

互に對立させることになるから。

斯樣にして吾々は、各〻の任意の定言のうちに、恰も一の『細胞』における如く、辯證法の一切のエレメントの胚種を發見し、かくて辯證法は一般的に人間の認識の總體に固有なものであるといふことを、指示し得る(且つすべきである)。自然科學はまた自然科學で、客觀的自然をば、箇別から普遍への、偶然から必然への轉化、推移、跳躍、對立物の相互的聯絡といふやうな同じ性質を有つたものとして、吾々に示す。(さうして、それは更に、任意な簡單な例について立證さるべきである)。だからこそ辯證法は(ヘーゲルの、および)マルキシズムの認識理論である。事實のかゝる方面をこそ(茲ではそれが事實の『方面』ではなく、その本質に係る)プレハーノフは等閑に附し、その他のマルクス主義者は全く口をつぐんでゐる。

認識は、ヘーゲル（論理學を參照せよ）ならびに自然科學の近代的『形而上學』、即ちヘーゲル派の折衷論者および反對論者（實はヘーゲルを理解してゐない）パウル・フォルマン（彼れの『自然科學の認識理論的根本特徴』を比較せよ）により、循環の體系の形態で現はされてゐる。

哲學の『循環』――（年代記が必要であるか？　否！）

古代――デモクリットからプラトー、そしてヘラクリットの辯證法まで。

復興時代――デカルト對ガッセンディー（スピノザ？）

近代――ホルバッハ――バアクレイ、ヒューム、カントを

LIBRARY OF CONGRESS
0 020 208 899 5

越へてヘーゲル。ヘーゲル――フォイエルバッハ――マルクス。

各種の段階(Schattierungen)の、現實への近接の諸段階の、無數のものを伴ふところの、(各〻の段階から一全體にまで成長する一の哲學的體系を伴ふことの)、生きてゐる多方面的な(無限に增加する方面を有する)認識としての辯證法、この數へきれない豐富な內容を、『形而上學的』唯物論と比較せよ。後者の主たる欠陷は、寫象理論の上に、認識の過程や發展やの上に、辯證法を適用することの無能力に存する。

哲學的唯心論は、粗野な簡單な形而上學的唯物論の見地からのみ、無意義である。辯證的唯物論の見地からすれば、それと逆に、哲學的

Rēnin no benshōhō
880-04 Kawakami, Hajime, 1879-1946;Deborin, A. M. (Abram Mo
12311653
Library of Congress, Asian Division
[94] reninnobenshoho008800_0
00202088995
Jun 11, 2014